



**Wilhelm Furtwängler conducts
Schumann & Beethoven**

aud 91.441

EAN: 4022143914415



Record Geijutsu (Masaki Yoshioka - 01.01.2018)

Japanische Rezension siehe PDF!



過去のCDとは次元を異にする 音質の生々しさ

「世界初出音源《マンフレッド》序曲が含まれた
1953年ルツェルンのフルトヴェングラー」



1953年ルツェルンのフルトヴェングラー
〔シューマン:《マンフレッド》Op. 115序曲, ベートーヴェン:交響曲第3番変ホ長調Op.55《英雄》, シューマン:同第4番二短調Op.120〕
ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮ルツェルン音楽祭
〔録音:1953年8月26日(L)〕
〔オーディオ:テ①KIGC27~8〕
(CD&SACD)

Masaki Yoshioka 芳岡正樹

フルトヴェングラー・ファンの間で凄演として夙に知られていた1953年8月26日、ルツェルン、クンストハウスでのライヴ録音が、ついにスイス放送協会(SRF)のオリジナル・マスター・テープからCD化された。録音を聴くと、ノイズ処理などの加工はあまり施されていないようで、オリジナルに忠実な復刻と思われる。音質の生々しさは、ルヴォックスのテープ・レコーダーで私的に収録された音源を用いた過去のCDとは次元を異にするものだ。

加えて、今まで失われたと思われていた、当演奏会の1曲目、シューマンの《マンフレッド》序曲が新発見されたのが非常に大きい。われわれは演奏会から65年も経過した今、この演奏会の全容を、会場の雰囲気豊かに湛えた録音により追体験できることとなった。こうしたことを改めて想うのも、《マンフレッド》序曲の演奏が、いかにも実演的であり、同時にフルトヴェングラー的であるからだ。《マンフレッド》序曲冒頭、主人公の心の衝動を表わす3つの和音！この鬱然とした、物々しい出だしから、聴き手は一気に実演的

な雰囲気のみ込まれてしまうことだろう。何ものかを手繰り寄せようとする序奏部の緊迫感に富んだ歩み、それが徐々に高潮し、輝かしいトランペットを合図に凄まじいアツチエランドで、激情的なテンポの主要部を導く劇的效果！スイスの主要オーケストラから集まったルツェルン音楽祭管弦楽団の楽員たちが、アマチュアのように夢中になって巨匠の指揮についていつているの目に見えるようだ。彼はこの劇音楽の序曲を借りて演奏会の幕開けとするとともに、冒頭3つの和音からその後の音楽が、ひいては演奏会全体が生成してゆくことを示しているのである。

フルトヴェングラーの「音楽観そのもの」《英雄》

続くベートーヴェンの《英雄》。冒頭ふたつの主和音連打が、主和音の構成音のみで造られた主題を導き、作品全体をも予見するこの名作は、「第1楽章の音が鳴り始めた瞬間から発展しはじめ、それに続くすべての部分はここから生まれる」とのフルトヴェングラーの音楽観そのものであり、演奏回数も多く、この録音を含めて10種

のディスクが残されている。筆者は冒頭のふたつの和音を含めて、表情が引き締まり、響きも重厚な52年12月8日のベルリン・フィルとのライヴを推している。対して、ルツェルン音楽祭管は表情が開放的で、響きは十分重いものの、弦も管も音色がずつと明るい。しかし、彼はこの違いを、むしろ喜んでいたのでないだろうか。

こんなことを直感したのは、ブックレットに収められたルツェルン湖畔で寛ぐ巨匠の写真である。毎夏ザルツブルクやルツェルンでベルリン・フィル以外を指揮した彼は、日常生活を離れて、気分を一新して楽曲に向き合うことで自らの芸術に新風を吹き込んでいたに違いない。このルツェルンの《英雄》の迸る表情をもちながらも凝縮しすぎない、広々とした気宇の大きさ、晴れやかさは格別である。

後半のシューマンの交響曲第4番冒頭はビッグバンそのものだ！こうなるとベルリンもルツェルンもない。スケール極大、明るい響きと凄絶な表情、詩人と野人、冷静と熱狂が交錯しながらスリル満点に、生成してゆく激動する音楽にしがみつくな！